

## 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	玄関や休憩室などに理念を掲示し目に触れやすいようにしている。朝礼の際に理念の唱和をすることで意識付けを図っている。	現在の事業所理念は今の管理者が提案して作られた理念である。支援はこの理念に沿った支援となるよう全職員で取り組んでいる。今後の理念見直し等については、管理者は職員皆が話し合っ、現状に即した現場で活かされる理念作成をと考えている。近々話し合いの場を持ち、新しい理念を創り、職員皆が同じ方向性で自分たちの理念の下、利用者の生活を支えて行こうとしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地元自治会に入っており、回覧板等を回していただいている。地域の行事などすべて中止になってしまったが、回覧板を通じて関係をつないでいる。	コロナ禍にて地域の行事は、ここ2～3年ほとんど中止となっている。対面が難しい中、直接の参加は難しいが、小学校の行事のランタン作りに作品を提出したり、自治会の回覧板に事業所の「たより」を載せてもらったり、職員が地域の側溝掃除に参加したり、できる範囲で交流を持とうと努めている。地域からは防災訓練時には避難時の声かけや手伝いの申し出をもらうなど地域から温かく見守られている事業所である。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	小学生の認知症サポーター養成講座など認知症についてのお話をする機会が中止となってしまったが、電話でご相談をいただいた際には認知症ケアについてなど相談を受けている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議の開催を自粛しているが、施設の現状を書面で各委員に報告している。	運営推進会議は区からもコロナ禍にて会議開催自粛要請があり2～3年会議は開催されていない状況である。毎回施設の現状を書面にして直接会員に届けている。訪問時に意見等も伺うようにしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	事業所運営上の疑問点などを随時相談しており、助言をいただいている。些細なことでも相談し関係を深められるようにしている。	区の担当者には、確認事項、疑問点等随時連絡し、相談、助言をもらい運営に活かしている。地域包括支援センター職員とは、会議の資料を届けた時や、地域の会議に顔を合わせる機会も多く、相談しやすい関係となっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	内部の勉強会や新人研修の際に身体拘束をしないケアについて学び、日頃のケアを振り返り身体拘束のない支援に取り組んでいる。	新人研修時の他、年1回虐待防止研修とともに、内部の勉強会で学ぶ機会がある。職員が交代で講師を務める事で、より深く学び、全職員は理解できている。自己点検シートを活用しての振り返りの機会があり、職員同士で確認しあう事で拘束しないケアに取り組んでいる。玄関は夜間のみを施錠し、事業所内はユニット間で自由に行き来できる解放感がある作りとなっている。	
7	(5-2)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	内外の研修会等で学ぶ機会を持っている。何が虐待に当たるのかを考え、見過ごされることがないようにスタッフがお互いに注意できる関係づくりと共に防止に努めている。	身体拘束研修とともに新人研修時、年1回の内部の勉強会で学ぶ機会があり、虐待の定義については、職員全員理解している。スピーチロック、何気ない言動のグレーゾーン部分を職員同士で声を掛け合い、見過ごされることがないようにしている。	
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在は制度を利用している入居者はいないが、研修等の機会に理解を深めるように努めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約書、重要事項説明書等の他、ホームでの生活についても丁寧に説明している。「最後まで居られるのか？」等の不安が多いため、終末期、看取りについても説明している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者や家族が意見や要望を話しやすい雰囲気や関係を作るように努めている。ご家族への連絡の際にもご意見ご要望をお聞きしている。	一時的な面会時、受診同行時の家族訪問時には、意見、要望を聞くようにしている。コロナ禍で面会自粛が続いているため、事業所から定期的に電話で意見を伺うようにしている。利用者からは、生活の中で何気ない言葉や表情から読み取るようにし、支援に反映させるよう努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に1度の部署会議にて職員の意見や提案を聞く機会としている。意見を全員で話し合い、運営に反映している。	毎月の部署会議には、議題を決め職員が意見を出し合い支援の方向性を決めている。ヒヤリハット時は時間を置かず話し合い、早急に対応できるようにしている。日常的にはケアマネージャーや管理者に意見が伝えられ、内容によって統一内容となるようにしており、意見を埋もれさせないように支援に繋げている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境条件の整備に努めている	介護業務に関わる資格取得や研修の参加を支援しており、モチベーションアップできるようにつとめている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	内部の学習会を毎月1回実施しており、職員同士が学びあえるようにしている。また外部の研修にも参加できるように支援している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	南区内の介護事業所の会の会員となり、研修会の参加や情報交換をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前面接時に本人や家族の身上を把握するとともにその思いや不安を受け止め、納得のいく説明や事前見学にて交流を図るなど安心と信頼が得られるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の意向とホームに望むこと、ご本人への思いなどを引き出し、安心と信頼が得られるように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご本人、家族の状況や希望を様々な観点から必要性を検討し、他のサービス事業者とも情報交換しながら対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	行動や会話から出来る事、したい事を汲み取れるように努力し、ゆったりとした環境の中で一緒に作業をし関係を作っている。		
19	(7-2)	○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご本人の様子を共有し、家族の状況にも配慮しながら、それぞれができる協力をお願いしている。	コロナ禍で遠慮してもらっているが、家族の中には「自宅に連れていきたい」「墓参りに連れていきたい」「食事に連れ出したい」との要望がある。事業所から必要な物、足りない物の依頼時の協力、受診同行とそれぞれできる範囲で利用者を思い、支援している。事業所からは、面会ができない中、利用者を身近に感じてもらえるよう毎月のおたよりに同封し利用者毎に写真や近況を記し送付している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	人間関係や馴染みの場所などを本人や家族から情報収集をしている。面会制限のある時はリモート面会や電話での会話を支援している。	外出、訪問、面会の自粛が継続しており、外部との交流はほとんどない中、年賀状のやり取りの支援、友人との電話の支援等、できる範囲で関係継続できるように支援している。コロナ収束後には、希望があれば、行きつけの美容院利用や友人、知人の訪問など利用者が元気になるような支援を実施したいと考えている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	職員が間に入り利用者同士が関係を築けるように配慮している。また、相性を考慮しホールでの席なども考えている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後も相談に乗れるように声をかけている。入院や他のサービスに移行する際も丁寧な情報提供に努めている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の生活を通じて個々の発言や表情などから思いを推察するとともに、家族の希望や意向を聞きながら検討している。	初回のアセスメント時に本人、家族の思いや意向、日々の状態や暮らし方を詳細に確認している。入居後の生活に寄り添うことで見えてくる要望や希望、行動や表情を汲み取り、目線を合わせて日々の生活が安心できるように対応している。気付きや新しい情報は業務日誌やタブレットに記録して全職員で共有している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24	(9-2)	○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前や入居後も利用者、家族から情報を得たり、必要があれば以前利用していたサービス事業所からも情報を得ている。	アセスメントした情報や前任のケアマネジャーやサービス事業所からの情報を参考に、生活歴や価値観、趣味、地域での関わりなど、馴染みの暮らし方を把握している。生活環境の変化にも配慮して、入居後の生活も本人らしく暮らしていけるように心掛けている。	
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の様子、記録やアセスメントから個々の状況を把握し、カンファレンス等で情報交換することで共有している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人、家族、職員や必要があれば主治医や看護からも意見を集約し、会議にて話し合っている。計画の評価と意見交換をすることで、その方にあった計画の作成を行っている。	本人、家族の意向や課題を踏まえ、居室担当者が職員からの意見を集約して、ケアマネジャーと介護計画を作成している。居室担当者が3ヶ月毎にモニタリングを実施し、6ヶ月毎に本人、家族の意向を確認し、カンファレンスを開催している。日々の生活から見えてくる必要な支援を見直し、現状に即した介護計画を作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	生活の様子や状態変化など個別の記録や申し送りシート等を用いて全職員が情報共有できるようにし、介護計画作成の際にも活用している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族が望むことが、どのようにすればできるのかを考え、フォーマル、インフォーマルを問わずに検討できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍で今年度はできなかったが、地域のお祭りや文化祭など地域の行事に参加したり、ボランティアの方に来所してもらったりと、楽しく生活していただけるように支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人や家族が希望している医療機関で受診している。状態を家族に伝え、必要があれば主治医に報告をすることで適切な医療が受けられるように努めている。	本人、家族が希望する医療機関を尊重している。入居後往診医に移行することも可能である。受診時には日々の状態を書面で伝達して、主治医との連携を図っている。往診医は4週に1回の往診体制で、異常があれば24時間対応で診察してくれる。週1回訪問看護からも健康管理や服薬確認、主治医との連携など、安心できる医療体制が整っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回、訪問看護師が来所し、入居者の状況を確認している。また、24時間連絡の取れる体制があり、相談や報告をすることで適切な対応をしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院時には病院のMSWや看護師と情報交換し、適切な治療と退院後の支援ができるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることができることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居の際に本人や家族の意向を確認し、事業所ができることを説明している。状態が変化した際はその都度、意向や対応について本人、家族、事業所、かかりつけ医と話し合いをしている。	入居契約時に「重度化対応、終末期ケアの対応方針」について、事業所として出来る事、出来ないことを説明して同意を得ている。本人、家族、医療、職員との協力体制を図りながら、対応方針を決定し、利用者や家族の安心に繋がる協力体制を整えていく方針である。職員は看取りケアの研修にも参加しており勉強会も開催している。本人、家族の思いを受け入れて、本人の状態に応じた病院や施設入所への推進支援も対応している。	
34	(12-2)	○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	マニュアルの確認や研修を実施し、緊急時の対応ができるようにしている。AED、心肺蘇生の実技研修も行っている。	急変時や事故発生時にマニュアル、症状別緊急時対応一覧が整備されており、ホールの目の付く場所に設置してある。AED・心肺蘇生の実技研修も定期的に行い全職員は修得している。職員は利用者の日々の体調を管理して、異変や急変を見逃すことなく急変時の対応を修得している。	
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回、防災訓練を実施し、マニュアルの確認も行っている。自治会とは災害時対応の情報を共有し協力し合える関係を築いている。	年2回、年間防災訓練計画に基づいて実施している。マニュアルの整備、消火訓練、避難場所も理解している。自治会と災害時対応の情報を共有し協力体制を整えている。防災リュック、備蓄品、懐中電気、ヘルメット等も整い、いつでも持ち出せる場所に設置してある。利用者情報はタブレットに入力してあるので災害時には持ち出せるようにしてある。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉かけやプライバシーに配慮し、職員1人ひとりが丁寧な対応を心掛けるよう研修等で学んでいる。また、お互いが指摘し合えるように努めている。	プライバシー保護のマニュアルを作成し、研修会を開催して職員は利用者一人ひとりに合った言葉かけや日々の対応などプライバシー保護を学んでいる。職員同士による気付きの声かけなども行い、全職員が一人ひとりに寄り添い、尊重した対応が出来るように心掛けている。日々の記録や情報はパソコン内に入力することで情報の管理も責任ある取り扱いを行なっている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の希望を確認し、自分で選択していただけるように配慮している。意思表示の困難な方には表情や雰囲気などから推察し、できるだけ本人の希望に沿った支援をしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者個々のペースを保ちながら、本人の気持ちを尊重し、無理なく生活ができるように支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人に選択していただいたり、家族に本人の好みを聞きながら、その人らしくいられるように対応している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の好みや形態を利用者に合わせ提供している。1人ひとりの出来る事を見極めながら利用者と職員と一緒に準備や片付けをしている。	宅配業者による献立と食材を利用し、栄養バランスにも配慮されている。四季折々に畑で採れた野菜を取り入れたりと食べる楽しみを醸し出している。利用者個々の出来る能力を引き出し、職員と共に行なっている。特別食の時は松花堂弁当に盛り付け楽しく食べる企画も行っている。おやつの中にはホットケーキや色んなデザートを利用者と共につくり、楽しみの時間となっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	各利用者の食事量、水分量を把握し、適切な食事形態にて支援している。その時の状態に合わせて個々に対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	利用者個々の能力に応じた見守りや介助を行っている。対応が難しい方にも職員間で検討し、口腔内の清潔が保たれるようにしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄パターンをチェック表で把握し、トイレで排泄できるように誘導している。個々の能力に応じた介助を行い失敗が少なくなるように努めている。	排泄チェック表はタブレットを活用し一人ひとりの排泄パターンを把握しており、トイレで排泄できるように支援している。一人ひとりの習慣や身体機能を理解し、さりげない声かけや羞恥心にも配慮して適切な支援が出来るように全職員は介護方法を修得している。リハビリパンツやパット類は安易に使用せず、使用根拠を検討してから家族に確認のうえで使用している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便状況や水分摂取量を把握し、食事内容にも配慮している。その人に合った運動もお勧めしている。それでも便秘のある方には医師と相談しながら対応している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	1人ひとりがゆったりと入浴できるように時間や順番に配慮している。本人の希望や体調などに応じて柔軟に対応している。	週2回、午前中の中入浴を基本としている。浴室内は冷暖房や福祉用具も整備されており、一人ひとりがゆったりと気持ちよく入浴できるようになっている。普通の個浴とリフト浴があり、状態に合わせて安全に入浴が出来るようになっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々の生活リズムに合わせて就寝できるように支援している。また、体調や疲労具合に応じて休んでいただくように促している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個々の薬の説明書をファイルに綴り、職員がすぐに確認できるようにしている。また、薬剤師に相談できる体制を整えている。個々の状態に応じて服薬できるように支援している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	その方の生活歴に合わせた役割や楽しみができるように、能力に合わせて行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	その日の天気や利用者の体調を考慮して散歩やドライブなどに出かけている。また、希望を家族にも伝えている。	外出は年間行事計画を作成している。季節のドライブや花見、凧合戦など外出する機会を企画している。天気の良い日は施設周辺を散歩したり、日向ぼっこしたりと外の空気に触れるようにしている。事業所内で出来る季節毎の作品を利用者と共に創り、楽しい時間を過ごしている。外出時の様子や日々の生活の様子を写真に撮り、コメントや気付きを記入して毎月家族にも配布している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご本人やご家族の希望がある時は相談し、その方の能力に応じて、所持や使用ができるように支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	事業所の電話にて、電話の取次ぎや希望がある時は電話をかける支援をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	花を飾ったり掲示物によって季節感を感じてもらえるようにしている。室温や湿度にも配慮している。	共有空間は明るく、機能性に配慮した生活の場となっている。フロアの壁には利用者と共に創った季節の作品が飾られ楽しめるようになっている。所々にソファを置き、一人ひとりが好きな場所で寛げる空間となっている。ユニット間の通路からは庭も眺められ、季節を感じさせてくる。施設内は体感温度に合わせた空調となっており、常に職員が居り、お話ししたり見守ったりと、目配り気配りがあり安心して過ごせる生活の場となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファや椅子を置き、どこでも腰を下ろせるようにしている。個々に好きな所で過ごしていただいている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人や家族に馴染みの品物の持ち込みを働きかけており、居心地のいい場所になるように相談しながら対応している。	居室には馴染みの物の持ち込みは自由である。本人、家族の思いを大切に、その人らしい居室作りとなっている。また、状態に応じて部屋の模様替えも支援している。部屋のドアには花の写真を飾り、自分の部屋である事を意識できるようになっている。部屋の掃除は、利用者個々の能力を活かしながら、職員と一緒にしない自立した生活が送れるように支援している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者の状況に合わせて手すりを設置したり、危険と思われる個所はその都度対応を検討し改善に努めている。		